

抑うつに関する内的作業モデル研究の展開

－アタッチメントからソーシャル・ネットワークへ－

鳥丸 佐知子

Bowlbyに端を発するアタッチメント理論は、乳幼児期の研究を中心に、パーソナリティ発達の総合理論として提唱されてきた。本稿では特に「抑うつ」に焦点を当て、「内的作業モデル」としての考え方を中心に、まず従来のアタッチメント研究の流れを概観する。その後ソーシャル・ネットワーク等を重視する最近の流れについても紹介する。

キーワード：アタッチメント、内的作業モデル、抑うつ、ソーシャル・ネットワーク

1. 愛着研究の史的概観とその概念

「愛着（アタッチメント）」に関する理論研究は、Bowlbyがホスピタリズムに関する研究を1969年に発表して以来、約半世紀に渡り、さまざまな流れをたどりながら、パーソナリティ発達の総合理論として提唱され続けている。一般に「愛着」というと、文字通り「愛してくっつく」に通じるような、スキンシップや「愛情の絆」のみを指すと考えられることが多い。しかし「愛着」や「アタッチメント」という言葉には、実はいくつかの定義がある。例えば、心理学辞典などによる辞書的な意味合いで用いるとき、そこではもっぱら「乳幼児と養育者の間の情緒的な絆・関係性」という意味で使用される。当初Bowlbyも、アタッチメントを「情緒的絆」と考えていた。またより詳細な説明として「安全基地として利用する乳児の行動システム」とするものもある。その場合、乳幼児が危機的な状態に陥ったときの安全な港、またそうでない時にも「安全基地」として利用される「行動システム」

的なものとして説明される。さらに親側の表象レベルの愛着、すなわち親が自身の被養育経験を基礎に形成した「内的作業モデル(Internal Working Model)」と、それが自分の子どもとの関わりにどのような影響をもたらすのか、また、子ども側の愛着パターン形成にどのように関与するのかといったことに重みをおく「愛着表象」としての考え方もある。これについては、臨床場面を中心に、近年再び注目が集まっている。なぜならこの問題は、虐待臨床などでしばしば取り上げられる「乳幼児期に虐待された親は、我子に虐待を繰り返すリスクが高い」という「世代間伝達 (Intergenerational Transmission)」のテーマも同時に取り扱っているため、性急に研究が進められなければならない分野であると考えられているためである。

アタッチメント理論は、臨床上の問題の研究と、精神病理学の発達の中にその起源を持っている。前述のように、まずBowlbyが唱え、その後Ainsworthによって実証的研究が進められた。Ainsworthは特に母親の役割を実証的に研究したが、ストレンジ・シチュエーショ

ン法 (Strange Situation Procedure ; SSP) などを通して、愛着経験の累積から、乳児の内的表象の世界が発達することを証明した。初期のアタッチメント研究は、ノーマティブな発達の研究ではなく、いずれも個人差により注目している研究であったという点は注目すべきであろう。その後SSPによる乳児の愛着パターンを成人パターンに翻訳した成人愛着面接 (Adult Attachment Interview ; AAI) の作成者メイン (Main) の研究によって、アタッチメントは源家族との関係について測ることになり、世代間伝達との関わりも盛んに論じられるようになる。また1985年から87年頃になると、社会心理学者の Hazan & Shaver が大人のアタッチメントに関して、恋人や配偶者との関係に注目するようになる。その結果、各種質問紙法なども開発されてくることになる。他に、Grossmann や Sroufe などが実施している「ミネソタ縦断研究」に代表されるように、ライフサイクルに渡る愛着の縦断研究を現在も継続している研究者もある。これらの研究は、乳幼児期に獲得した愛着パターンが、それ以降、一貫性・継続性を持って発達し、その個人が親になった時の育児行動にあらわれることを示唆している。またこれらの研究を進めていくことは、母親の周産期抑うつ、親の母性的養育の剥奪、虐待傾向など、精神病理の高い親のもとで育つ乳幼児の発達や、予防・治療の研究にも広汎に使用できるかもしれないとも考えられている。

2. 内的作業モデルという述語

内的作業モデル (Internal Working Model) という言葉は、内的表象という伝統的な精神分析的概念に多くの点で同義であるとともに、

それにも変わるものであるといわれている。人は環境についての力動的な表象構造である内的作業モデルを構築することにより、外界行動を起す以前に、内的に様々な行動の選択肢をミュレートしていると考えられている。つまり人は、現実が生じてくる状況よりも、自らが予測した状況に反応しているというのである。この考え方をメンタルモデルとして精緻化し、認知的諸活動一般に拡張したのが Johnson-Laird である。Bowlby は、これに愛着対象の内的作業モデルの概念、パーソナリティの発達、そこでの心理的機能の役割の概念を導入して、理論の拡大および再定式化を行った。彼は「Attachment and Loss (母子関係の理論)」の3部作のそれぞれの中で、この内的作業モデルについてさまざまな言及をしている。Bowlby によれば、内的作業モデルとは、子ども時代に構築された心理表象で、主に重要な世話を与える人 (愛着対象) との初期経験に基づいて形成されると考えられている。子どもは愛着対象との具体的な経験を通して、愛着対象への近接可能性、愛着対象の情緒的応答性などに関する主観的な確信・表象を持つようになる。そしてそれによって、人や世界との持続的な交渉を通して形成される世界、他者、自己、そして自分にとって重要な他者との関係性に関する表象を作り上げる。つまり内的作業モデルとは、愛着対象に子どもがとった行動、あるいはとろうと意図した行動に対して、愛着対象がどう反応したかの歴史ともいえるものである。そしてそこで「自分自身が愛着対象にどのように受容されているか、あるいは受容されていないか」の「主観的」な考えにより形成されると考えられている。さらに、このモデルは、自己に関するモデルと相対する形で形成されると考

えられている。「望まれない子どもは、自分は両親によって望まれていないと感じるだけでなく、本質的に望まれるに値しない、つまり自分は誰からも望まれないと信ずるようになるし、逆に両親から愛されている子どもは、両親の愛情に対する確信だけではなく、他の全ての人からも愛されていると確信して成長する」という Bowlby の言葉は、それを上手く表現しているといえるであろう。そのため例えば虐待をする親との相互作用をもとに形成された子どものモデルなどは、自分自身を守るため、特定の情報（例えば愛着のシグナル、愛着経験に伴う感情など）を、長期、あるいは永続的に意識から排除するよう機能する可能性を持つことがあるという。この機能は「防衛的排除」と呼ばれる。そしてそれは、一時的な認知的・情緒的葛藤にとどまらず、より長期に渡る対人不適応、虐待などの愛着関係の障害、重篤な精神病理等と関係を持っているかもしれないと考えられている。

ここで最も重要視されているのは、子どもにとってある特定の対象が、信頼するに十分なくらい役に立ち、情緒的に応答的であるかということである。そして愛着対象の前で「受け入れられるものとしての自己」の表象モデルを作り上げられることが、同時に自分自身「安全である」と感じることに結びつく。よって、もしストレスフルな状態において、愛着対象がなぐさめにならないと感じられたとき、その子どもは拒絶するものとしての親の内的作業モデルだけでなく、彼（彼女）自身をなぐさめられたり助けられたりする価値のないものとして認識するようになる。

抑うつとの関連から考えるとき、たとえば、子どもに抑うつや悲しみなどを優位化させやすい愛着関係として、Ainsworth 以来の伝統

的愛着分類の C タイプ（＝両価型）の下位型 C₂（＝受動的 C）がある。このタイプでは、子どもの母親（＝愛着対象）は相対的に抑うつ傾向が強かったり、情動の平板化傾向が強い。あるいは子ども側が何らかの分離体験をしている。いずれにしてもこのタイプの場合、母親は自らの心的状態にのみ没頭しているため、子どもが母親になんらかの働きかけやシグナルの送出を行っても、それが無視され、あまり改善されることがない。結果として子ども側は、自分の力ではどうすることもできない、圧倒的な無力の状態に恒常的にさらされることになる。子どものあまりに長すぎる病的な喪の状態は、ポジティブな愛着関係の内化に失敗した結果であるとされる。

Main は、「心の理論（Theory of Mind）」の発達という観点から、内的作業モデルに関して述べている。3歳以下の乳児の場合、心の理論あるいはメタ認知能力に限界がある。そのため、好ましくない相互パターンや外傷体験に曝されると、大人に比べ、容易に複数の相互に整合一貫しない内的作業モデル（Multiple Incoherent Models）が形成されやすくなる。その結果、愛着に関する情報の認知や処理に歪曲が生じてしまい、不安定な愛着の素地が出来あがってしまうと考えた。また Main は内的作業モデルの構成要素を、一般化された出来事の事象（General Event Representation：GER）とし、「愛着に関する情報の処理を制御するルール」と定義している。つまり、愛着に関する記憶の想起の仕方を方向付けたり、愛着に関する感情を抑制し、行動や思考・観念を方向付けるものと考えたのである。

これらいくつかに関しては、Bowlby 自身、その理論が年代を追うごとに微妙に変化して

いたり、分かりにくい部分や曖昧な部分も多い。しかし、従来の精神分析における病理論や防衛機制的考えを、情報処理という認知的視点から展開しているという点で注目に値するといわれている。

3. 抑うつ認知過程と

内的作業モデルと

Cummings & Cicchetti は、抑うつと愛着の関係について様々な方面から検討をおこない、トランザクショナル・モデルの提起に向けて研究を進めている。愛着と精神病理との関わりについては、「食べる (feeding)」という行動と関連があるとしばしば指摘される。授乳に始まるfeedingが、人間が生存するための基本的な条件の一つであると考えれば、ここからも「愛着 (アタッチメント)」という概念が、「warm」という言葉で表現されるような、暖かいポジティブなもののみを意味するのではないことが容易に想像できるであろう。そしてそれは「虐待する親にも子はしがみつく」という現象に代表されるように、むしろ困った時、極端な場合には、生死に関わるような危機状態とこそ関係のある現象であるという愛着理論の再考傾向とも一致する。Cummings & Cicchetti は、不安定な愛着関係の形成ということについて、抑うつ問題においても実証できないかと考えた。つまり初期の愛着における障害が、抑うつ発達・維持、さらに世代間伝達にもある役割を果たすのではないかと予測したのである。特にネガティブな自己概念と、不安定な親子の愛着関係は、喪失や拒絶の感覚を伴って、自己の否定的内的作業モデルの主な帰属原因となるのではないかと考えた。また世代間伝達との関わりでは、情緒障害が

伝達されやすいような、何らかの特色を持った家族内において、その相互関係の中でより伝達されやすくなるのではないかと考えた。

この「喪失」が抑うつパターンを促進するという考えは、Beck の認知療法の見方にも類似するところがある。長期に渡って両親が病的で心理的に利用出来なければ、結果として、自己は愛され得ないという予期を形成することになる。またそれは愛する価値がない、無価値で拒絶される存在、そしてその親はその子どもを見捨てるという思いこみへと発展し、抑うつ的なエピソードの核となる。心理的に親を利用できないことが、親と子の間の愛着関係を安全でないものにする。子どもの抑うつ発達や抑うつ前兆には、親から見捨てられる、すなわち「喪失」や「自己受容できないこと」をテーマとしたものがスキーマに組み込まれており、その内在化された過程も関与していると考えられる。そしてその喪失の感覚は、Beck の抑うつ三大徴候で示されるように、「その人自身」「彼 (彼女) の世界」「彼 (彼女) の未来」に対する見方全般に渡るようになる。さまざまな歪曲した思考過程、ネガティブな帰属概念、無価値観、自責の念、過度なもしくは不適切な罪の意識などは、抑うつ発症の引き金になりやすくなる。そのため、ネガティブライフイベントなどを経験した場合、このスキーマが通常の人より活性化しやすくなる。これらは認知的内容のみでなく、情動・動機付け、行動内容でも考慮することが必要となる。

片親もしくは両親が抑うつ的であることは、必然的に不安定な愛着世界と接することになり、子ども側にとっても、養育される環境上で、リスクが大きくなることになる。子どもは親から複数のメカニズムを伝達されるが、

親が抑うつエピソードを持っている間、子どもは親を情緒的に利用できない。この側面から内的作業モデルについて考える時、両親の認知的・情緒的スタイルの子どもへの直接的なコミュニケーションについて、また相互作用上での親の帰属パターンについても考慮することが必要となるのが分かる。

ところで、抑うつ的な親の群と統制群をもうけ、母子間における談話調査を行った Radke-Yarrow, Belmont, Nottelman, & Bottomly によれば、両群で子どもへの帰属量と内容は比較的似通っていたという。顕著な差が見られたのは、母親が子どもに返すときの声やしぐさなどの「情緒的トーン」であった。また帰属内容について検討すると「自己」に関連する内容が多かったのも一つの特徴であったと報告されている。つまりこの否定的な自己帰属の増加が、結果的に抑うつ障害発達へ影響を与える、抑うつへの脆弱性になっている

のではないかと彼らは考えている。この研究からも、認知的・情緒的内容伝達のモデリングの問題や、親の抑うつ的な言葉の過剰、抑うつ的な情動や行動が、何らかの影響を与えていることがうかがえる。子ども達はこのような複雑な関係付けのマトリックス、そして独立したメカニズムを通して、抑うつ的な世界や、情緒と認知の不安定な作業モデルを学ぶのかもしれない。

4. モデルの構築に向けて

それでは、「愛着と抑うつ」という複雑な関係の概念化は可能なのか。初期の不安定愛着関係における、認知的・情緒的発達の後遺症が、その後の抑うつ発症に関与していることは予測が出来る。しかし、今のところ、不安定な愛着と、抑うつを結びつける直接的な証拠はない。

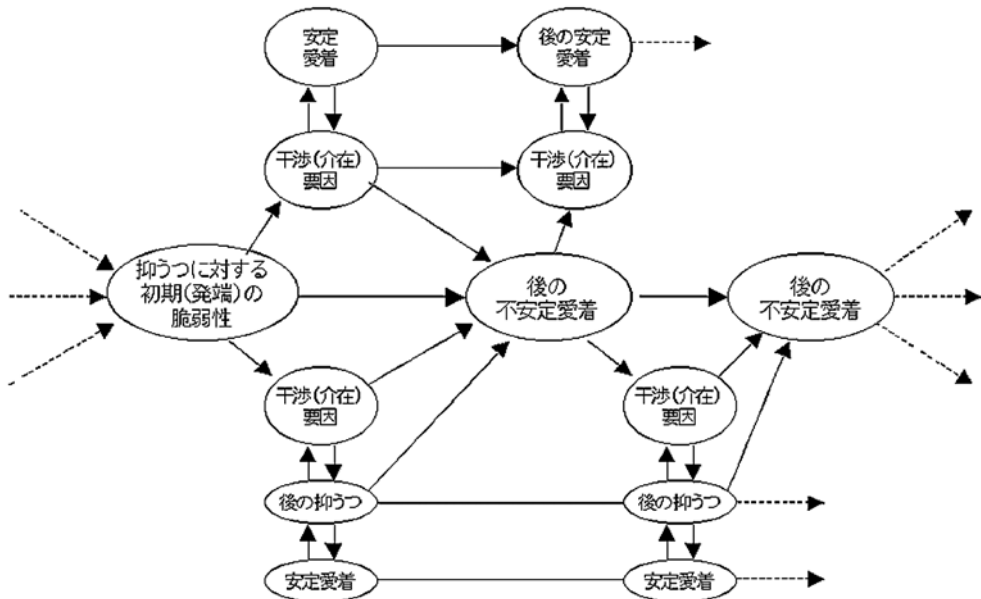


Fig.1 抑うつ、愛着の質、そして適応に対する初期の脆弱要因と因果関係

Table. 1 のちに抑うつ可能性を連想させる初期リスク要因のモデル

潜 在 要 因	補 償 要 因
持 続 す る 要 因	
<p>1. 個人的要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 発達のふしめにおける課題解決の不成功 (例: 不安定な愛着) ・ 心理的に利用できない養育者 ・ 自己の構造化された否定的スキーマ ・ 栄養上の不足 ・ 過度に真面目で愚痴っぽく、粘着質 ・ 個体化の失敗 ・ 結果として学習性無力感をもたらす行為と結果の間の非偶発的な反復される経験 ・ 生物遺伝因子アミンの数の減少 ・ 抑うつの遺伝子型 ・ 情緒障害を持つ親の子孫 ・ 欲求不満に対する過敏症 ・ 憂鬱 ・ 貧弱な自己コントロール能力 ・ 依存的 (過度に) ・ 情緒的ケアの不足 ・ 愛着像と自己の否定的な内的作業モデル ・ 付加された精神障害の存在 (例: 同時に存在する病的な人格障害) <p>2. 家族的要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 初期の分離・初期の喪失 ・ 病的に暗い抑うつの親 ・ 両親がごまかし (うそつき) 症候群 ・ 後の拒絶に伴って起こる初期の傷付き ・ 両価的・回避的・または無秩序/方向性のない愛着 ・ 家の中に数人の乳幼児が存在すること ・ 十分な時間もしくは部分的時間の使用の欠如・信頼もしくはパートナーの不在 ・ 11歳以前の分離か死別による母親の喪失 ・ 親のアルコール依存 ・ 親の精神病理 <p>3. 社会的要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 他者の評価に基づく自尊感情 ・ 貧弱なソーシャルサポート網 ・ 貧弱な仲間関係 <p>4. 環境要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 拡大家族でない事 ・ 近隣との不幸な関係 ・ 初期の剥奪 ・ 付随しないで起こる否定的な縛り ・ 夫婦間の軋轢 	<p>1. 個人的要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ストレスに対する回復能力 ・ ストレスに満ちた出来事の先行経験 ・ 攻撃性を適切に利用する能力 ・ 発達のふしめにおける課題解決に成功していること (例: 安定した愛着) ・ 情緒的に使用できる養育者 ・ 良好な身体的健康/病気に対する抵抗力 ・ 快楽を感じる能力が高いこと ・ 好ましい気質 ・ 欲求不満に耐えられる閾値が高いこと ・ 情緒的なケアのある生育史 ・ 愛着像と自己の肯定的な内的作業モデル ・ 安全感を強く感じられていること ・ 他の精神障害の不在 <p>2. 家族的要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 親に対する安全な愛着の絆 ・ 親との関わりと社会化において好ましい生育史を持っていること ・ 兄弟 (姉妹) 愛着 ・ 親の精神病理の不在 <p>3. 社会的要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 良い仲間関係 ・ ソシャルサポート網を利用できること ・ 家の外での良質のケア <p>4. 環境要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニティ情報源が利用できる事 ・ 経済的な情報源が利用できる事 ・ 良い結婚 ・ 拡大家族からの援助 ・ 近隣との満足のいく関係

一 時 的 要 因

1. 個人的要因

- ・ ストレスにより神経化学内での変化が引き起こされること
- ・ 効果的でないコーピングスタイル
- ・ 身体の病

2. 家族的要因

- ・ 激しい精神的もしくは身体的健康問題もしくは両親のアディクション
- ・ 両価的に愛される対象の喪失
- ・ 死別
- ・ 父もしくは母の仕事との関連から起こってくる分離：母の妊娠など

3. 社会的要因

- ・ 否定的スキーマに対する特殊なストレス
- ・ より初期の非偶発的な縛りに対する特殊な状況
- ・ ソシャルサポートの欠如

4. 環境要因

- ・ より初期の非偶発的な縛りに対する特殊な状況
- ・ 家もしくはデイケアの変化

1. 個人的要因

- ・ 効果的なコーピングスタイル
- ・ 他者に対する応答（他者との効果的な相互作用スタイル）

2. 家族的要因

- ・ 他の事と子どもに対して親が応答的であること
- ・ 親が利用できること
- ・ 兄弟（姉妹）もしくは拡大家族が利用可能で応答的である事

3. 社会的要因

- ・ 仲間や他者との支持的な関係
- ・ 家族内外でのソーシャルサポートの存在
- ・ デイケアをしてくれる人が安全を提供してくれること

4. 環境要因

- ・ 快適な諸活動
- ・ 家における軋轢の不在
- ・ 日課を予期できる事

つまり単一の理由（例えば不安定な愛着や初期経験モデルなど）のみでは不十分なのである。そこで、いくつかの複数の要因の統合が必要になってくる。また、その過程を特徴付けるものとして、スキーマと呼ばれるようなものが、本当に存在するのか否かということも問題になる。

Fig. 1 は Cummings & Cicchetti の研究をもとに、抑うつ、愛着の質、そして適応に対する初期の脆弱要因との因果関係について、一部を変更し、筆者が作成したものである。抑うつに対する初期脆弱要因、（例えば親の精神病理など）が子ども側に存在した場合、後の生活でも不安定愛着を示す確率が高くなる可能性は認められる。

しかしその後、生涯を通して起こってくるさまざまな経験によって、様々な結果が導き

出されることも分かる。つまり個人におけるそれらの重要性の比率の問題、重みづけの問題かということにもなる。これに関して、彼らは非常に複雑なモデルを提起している (Table 1 参照)。この内容から、親・子ども・環境要因のそれぞれが、構成要素として複雑に相互作用していることがうかがえる。これらの問題を、生涯発達の立場から捉えようとする時、一生を通じて誰にでも関係してくるような「発達のストレス」、そして事故・災害・病気・死別など、予期できないことを含む「偶発的ストレス」の問題。また抑うつ発症に関しての遺伝的要因を含む脆弱性をもった要因と、それに対する補償要因との割合なども考慮する必要があることも示されている。また節目となるいくつかの発達段階との関連も大きな要因になる。つまり抑うつは「潜在

的な要因が代償となるものに優先した時」、「いくつかの理論的閾がクロスした時」にのみ、目に見える形となって現れると考えられる。結果として原因ネットワークも非常に複雑になるのである。

5. 関連する研究の概観

個人的な処理方略のもとになる内的作業モデルが、愛着関係における経験をベースに展開される可能性は大きいと考えるのなら、愛着と関係付けられた経験が、抑うつ発症とも何らかの関連があることは想像できる。これは精神分析における対象関係論や、アタッチメント理論で強調される「親表象の重要性」ということとも関係してくる。精神科外来患者から広い範囲の母集団で調査を行った Parker は、彼らが「私が必要だったとき私を助けなかった」「私に成長して欲しくなかった」などの表現で、親的関わりが非常に希薄であったこと、親的な世話行動に問題があったことを語ると報告している。つまり自らの環境で、満足のいく親的関わりを期待できないことに対する過度の防衛が、大人の抑うつと何らかの関連があるとした。

また精神科入院患者を対象にした Raskin, Boothe, Reatig, Schulterbrandt, & Obel の研究では、抑うつ的な患者は健常群に比べ、彼らの親を肯定的に意味付けせず、否定的で罰を与えるような養育方略を使用したと想起するものが多いと報告されている。ここでも親対象は、過度に罰する、保護的でないものとして意味付けられた。また、抑うつ的な外来患者のグループにおいて、初期の親子関係の再収集をした Crook, Raskin, & Eliot の研究では、抑うつ的な大人は、健常な大人が経

験したのより、親から否定的な評価をより多く受け取っていたと述べている。これらからも、愛着の認知的コントロールシステムに関して、統合失調症や情緒障害のある患者の家族で表現される情動の問題が関与していることが推測される。つまりこれらの家族の「関係性」の中に、何らかの特徴が見出されたのである。

ところで、表現される情動の領域における研究は、主に英国で発展してきたが、最初に Brown, Monck, Carstairs, & Wing の研究を振り返る。彼らは統合失調症患者を持つ家族に対するインタビューを実施した。ここで使用された質問紙は、Camberwell family Interview (CFI) とよばれるもので、表面上は患者についての知識を得ることが目的となっている。しかし実際の主な目的は、患者に対する関係によって表現される感情を査定することにある。そのインタビューの結果、患者に対して批判、敵意、支配の感情表現評定の高い家族の患者は、低い評定の家族の患者に比べて1年以内に症状の逆戻りを示す事が多かった。また Hooley, Orley, & Teasdale は、抑うつ・躁鬱の研究において表現される情動パラダイムの適用を行っている。彼らは単極のうつ病患者を被験者として研究を行っているが、その患者との関係において、批判的表現の情動の絆を使用した配偶者と生活した場合、1年以内に59%が抑うつへの退行を示した。一方、情緒的で支持的な非批判的な配偶者と生活した患者の場合、退行率は0%だったのである。他に23人の入院している躁鬱病患者を被験者とし、9ヶ月間の追跡調査を行った Miklowitz, Goldstein, Neuchterlein, Snyder, & Mintz の研究もある。ここではキーになる家族との関係から、「表現された情動」

と「情緒的な相互行動スタイル」の測定を行っている。その結果、これら両方の得点が低い家族と暮らす患者の退行率が17%と非常に低い値であったのに対し、両方の得点が高い家族と暮らす患者の場合94%という極端に高い病気の再発が認められた。この結果は、退院後患者が生活をする家族の情緒的風潮が、双極うつ病患者の予後を、ある程度左右する可能性のあることを示唆するものである。同様の結果は、他の研究でも報告されている。

また、臨床的に抑うつ的な子どもと母親の研究として、例えばPuig-Antich, Lukens, Davies, Goetz, Brennon-Quattrock, & Tobak がある。健常群と非抑うつ群との比較を行った結果、情緒的関係の量の問題、コミュニケーションの豊富さと貧弱さなどで顕著な差が見られた。4ヶ月フォロー研究の結果、抑うつ無し状態の持続と回復のために、両親との関係が大きく関与している事がうかがえた。特筆すべきは、臨床状態において子どもの症状が改善された場合、それによって親子関係も改善するということがしばしばみうけられたということである。当然のことながらその逆もありえた。つまり愛着関係の表象モデルは、「親と子の両方において変化するのかもしれない」ということが示唆されたのである。

6. 今後の展望

以上いくつかの観点から、アタッチメントと抑うつとの関係についてみてきた。抑うつ発症・維持と、安定もしくは不安定愛着の関係、対象関係論やアタッチメント理論からの貢献、回復を促進するバッファーは何か、モデルの提起と概念化に向けての実証は可能で

あるかなどの問題も、まだまだ検討の余地が残されている。うつ病と躁鬱病の親とその子どもの関係、ハイリスク群の中での愛着の質と抑うつ発達にリンクはあるのかということもはっきりとした答えは出されていない。

そのような状況の中で、近年アタッチメント理論が二者関係のみにこだわりすぎるという反省や批判を含め、様々な方面において、ソーシャル・ネットワーク理論との論争が展開されるようになってきた。例えば、2001年のSRCD大会では「愛着を超える一複数の重要な他者との人間関係」というシンポジウムが開催された(マイケル・ルイス/高橋恵子(編訳)、2007参照)。両者は本当に対立概念なのか。この本の中でも「2つの理論は仲が悪いが、実際には互いに胸を貸し合って、それぞれの理論の精緻化をはかり発展してきた」のではないかと述べている。また近年、親しい人間関係や愛着の問題は、単に個人的か二者関係かの問題ではなく、生態学的、文化的問題の影響の方が大きいのかかもしれないという流れも出てきている。さらに、子どもは母親が養育すべきであるという理念も、ひとつのあり方に過ぎず、時代の流れとともに、望ましい発達の目標として、親たちが何に価値を置き、その共有する目標に対して、いかなる関係及び行動的スタイルを重要とするかについても変化しつつあるのではないか。また、各人のいわゆる「役割期待」は、ライフステージと関連していることも多いし、文化的に固有でもある側面も持っている。社会的期待がそれぞれのコミュニティで作られること、それに加えて、子どもも大人も、発達の途上で、必要な諸機能に見合う「複数」の他者を含めながら、親しい愛着関係を構築しようと努力するであろうという、いわばあたりまえの明

らかな事実について、従来のアタッチメント理論は、再度見直す必要に迫られているのかもしれない。

今後の課題として、上述の課題も踏まえながら、抑うつ的な大人の内的作業モデルを探ること、また子ども時代の親子関係では抑うつ的であったが、その後ケアされた抑うつ者の、回顧的調査も必要となってくるだろう。

抑うつ的な子どもと、その母親との相互作用、患者の配偶者や親など、家族の中の情緒障害との関わり方の問題なども興味深いテーマである。また、抑うつ発生に到る道筋の複雑性を考えるとき、生涯を通してのアタッチメント研究の必要性も望まれる。セルフスタイルの問題やライフサイクルとの関わりなどを考えても、乳幼児期を越えた愛着の中の相互関係の回顧的研究は不可欠であると思われる。さらに、別の分野における、抑うつと関連した精神物理学的・生物化学的要因の究明などもこれらの問題の解決の大きな力となるであろう。今後、学際的な部分も含め、多くの分野からの研究が望まれる。

参考文献

- Cummings, E. M., & Cicchetti, D. 1990
 Toward a Transactional Model of Relation
 between Attachment and Depression. In
 Greenberg, M. T., Cicchetti, D., &
 Cummings, E. M. (Eds.), Attachment in the
 preschool years : Theory, Research, and In-
 tervention. Chicago : University of Chica-
 go press. Pp.339-372.
- 数井みゆき・遠藤利彦（編著）2005
 アタッチメント 生涯にわたる絆
 ミネルヴァ書房
- マイケル・ルイス/高橋恵子（編）2007
 愛着からソーシャル・ネットワークへ
 発達心理学の新展開 新曜社
- 鳥丸佐知子 2002
 軽度の抑うつ者における認知心理学的研究
 学位申請論文（未公刊）